

## Human abilities: Emotional intelligence.

人類の能力;エモーショナル・インテリジェンス

Mayer, J. D., Roberts, R. D., and Barsade, S. G. (2008). Human abilities: Emotional intelligence. *Annual Review of Psychology*, 59, 507-36.

Rep. 小森めぐみ<sup>1</sup>.

### Key Words

emotional intelligence(エモーショナル・インテリジェンス), cognitive abilities(認知的能力), emotional knowledge(感情の知識), emotional perception(感情の知覚), psychological assessment(心理測定)

### Abstract

エモーショナル・インテリジェンス(以下EI)は、感情に関して正確な論理的思考を行う能力と、思考の促進のために感情や感情関連の知識を使用する能力に関連する。本章ではEI概念の起源について述べ、EIを定義し、EIが扱う領域について説明する。本章ではこれまで理論上あるいは方法論上の見地から取られた3つのアプローチをレビューする。私たちは、特定能力アプローチと統合モデルアプローチが適切にEIを概念化し、測定することを見出した。このレビューでは、社会的成果、パフォーマンス、および心身の健康などの有意義な基準と、EI測定の間接的関係を取りあげる。そして考察に続けて本章のポイントと今後研究すべき問題をリストアップする。

### Contents

EMERGING RESEARCH IN EMOTIONAL INTELLIGENCE	508
THE SCOPE OF EMOTIONAL INTELLIGENCE	509
What is emotional intelligence? / Can emotional intelligence be conceptualized validly? / The general scope and boundaries of emotional intelligence	509
APPROACHES TO EMOTIONAL INTELLIGENCE IN THE SCIENTIFIC LITERATURE	511
Theoretical approaches to emotional intelligence / Specific-ability approaches to emotional intelligence / Integrative-model approaches to emotional intelligence / Mixed-model approaches to emotional intelligence / Relating emotional intelligence to other psychological variables	511
MEASURES OF EMOTIONAL INTELLIGENCE	514
An evaluation of emotional intelligence measures / Adequate test design / Validity evidence from factor structure / Test relations to key benchmarks / Measurement issues regarding mixed-model scales	514
WHAT DOES EMOTIONAL INTELLIGENCE PREDICT(OR NOT) IN LIFE OUTCOMES?	520
Social relations in childhood and adolescence / Social relations in adulthood / Scholastic outcomes from grade school to college / Emotional intelligence at work / Psychological and physical well-being / Overall trends and intriguing findings	521
DISCUSSION	526
The scope and measure of emotional intelligence / Outcomes of emotional intelligence / Concluding comments	526

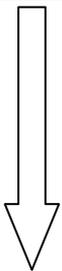
<sup>1</sup> 一橋大学大学院博士後期課程.

## EMERGING RESEARCH IN EMOTIONAL INTELLIGENCE (EI研究の興隆)

- 古代ギリシャ・ストア派哲学:感情<sup>2</sup>よりも理性(reason)を重視  
⇒18世紀のセンチメンタリスト;「心に従え」理性よりも感情を重視
- EI研究は、上記の理性 vs 感情の議論に対する新しいアプローチ  
➢ 感情について理性を働かせ、理性を感情で助ける
- EI研究は感情と知能両方の理解を深める(e.g., Sternberg, 2001)とともに、日常場面(家庭、学校、勤務先)で感情が果たす役割も指摘
- 本章では1990年~2007年初めに行われたEI研究を紹介する  
➢ EIの定義、関連概念との違い、実践的成果に及ぼす影響について述べる。EIは多義的に使用されているので、核となる概念や研究を挙げたい。

## THE SCOPE OF EMOTIONAL INTELLIGENCE (EIの領域)

### What is emotional intelligence?(EIとは何か?)



- ◇ 20世紀半ば…EIという言葉が様々な領域に登場。ex)ジーン・エア著 *プライドと偏見*
- ◇ 1960年代…科学的な文献にも登場。
  - セラピーとの関連(Leuner, 1966)、個人・社会の進歩への寄与(Beasley, 1987, Payne, 1986)
- ◇ 1980年代…複合的な知能という考え方が広まる  
⇒感情と認知の関係を調べる研究(e.g., Matthews et al., 2002, Mayer, 2000)が進行  
⇒EIを科学的に検討した論文(Mayer, et al., 1990, Salovey & Mayer, 1990)が登場
- EI概念はトピックの大衆化の推進(Goleman, 1995)とも重なって、劇的に広がった。しかし、その使われ方は多様(Bar-On, 1997, Elias et al., 1997, Goleman, 1995, Mayer & Salovey, 1993, Picard, 1997)

### Can emotional intelligence be conceptualized validly?(EIの妥当な概念化は可能か?)

- EIは様々な形で概念化(Locke, 2005)。
  - 感情について論理的に考える能力
  - 達成動機、幸福感、フレキシビリティなどの特性と同義の扱い

### *The conceptual network of psychological concepts.* (心理概念の概念的ネットワーク)

- EIは様々な用語やその意味合いが結びついた概念とも考えられる
  - Cronbach & Meehl(1995)の提唱する法則的ネットワーク<sup>3</sup>にあてはまるとも考えられる

### *Our view and definition of human mental abilities and intelligence.*

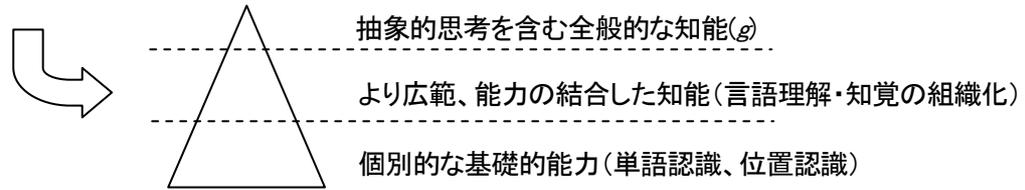
- 知能<sup>4</sup>;様々な情報(特定~全般、単純~高次)の処理と論理的な判断を司る心的能力<sup>5</sup>

<sup>2</sup>感情(emotion): 自己あるいは状況に対する評価によって生じる、身体の物理的変化・運動準備・行為に対する認知・内的状態の変化が統合されたフィーリング。

<sup>3</sup>法則的ネットワーク(nomological network): 科学者が自分の研究分野を理解するために用いる、相互に結びついた用語やアイデアを示す言葉。

<sup>4</sup>知能(intelligence): 特定の形式(例.言語)をもつ情報を認識・学習・記憶したり論理的に判断することを可能にする

- ・ 著者たちは知能を心的能力の階層構造を示す全般的な記述用語と考える



### *Our view and definition of emotion.*

- ・ 感情生起⇒生理機能、運動準備性、行動、認知、主観的経験が変化(Izard 1993; Parrott, 2002; Simon, 1982) 例)ハッピー⇒血圧の低下、他者への接近を志向する運動準備性、スマイル、しあわせな考え、いい気分
- ・ 著者たちの知能や感情の定義はそれぞれの分野において長年用いられてきたものと一貫するが、これ以外の定義も存在する(Averill & Nunley, 1993; Kleinginna & Kleinginna, 1981; Sternverg, 1985; Sternberg & Detterman, 1986)

### The general scope and boundaries of emotional intelligence(EIの一般的な領域と限界)

- ・ EIの類似概念;言語理解、知覚の組織化、広範な視覚化に関わる知能(Carroll, 1993)
- ・ 多くの知能は、特定のマテリアルの学習と論理的判断⇒その学習による知能の促進という形式  
例)言語理解;単語と意味を学習し、論理的な判断を下す⇒多くの単語を理解するほど知能促進
- ・ 上記をふまえると、以下のようにEIを定義できる
  - EIとは、感情に対して正確な論理的な判断が下せる能力及び感情や感情の知識を使って思考を促進させる能力
- ・ 感情や知能をある程度含むという観点から、EIにアサーティブネスや自愛を含める者もいるが、心の機能は高次のレベルでは相互に連結するもの。それをEIに含めてしまうと知能そのものへの注意がそがれてしまう

## APPROACHES TO EMOTIONAL INTELLIGENCE IN THE SCIENTIFIC LITERATURE (科学文献におけるEIへのアプローチ)

### Theoretical approaches to emotional intelligence(理論的アプローチ)

- ・ EI研究へのアプローチは複数の種類にわかれる
  - 特定能力アプローチ: EIを構成する個々の能力に注目
  - 統合モデルアプローチ: 個々の能力が全体としてどう統合されているのかに注目
  - 混同モデルアプローチ: EI以外の概念を含む⇒中途半端、概念の枠をはみ出す

### Specific-ability approaches to emotional intelligence(特殊能力アプローチ)

- ・ 特定能力アプローチ<sup>6</sup>: EIにとって基本的と考えられているスキルそれぞれ(感情の知覚と同定、感情を利用した思考、感情に対する論理的判断)に注目

心的能力(capacity)あるいはそのセットのこと。

<sup>5</sup>心的能力(mental ability): 問題解決などの心理的課題を正確性、新奇性、スピードなど特定の基準に合致するように解決する能力(capacity)のこと

<sup>6</sup> 特定能力アプローチ(specific-ability approach); EI特有のスキル(例. 効果的な感情管理)に注目したEIへの理論的アプローチ

### *Emotional perception and identification.*

- ・ 非言語知覚研究(勢力・親密性などの社会情報の判読+感情表出の正確な認識)から発展
- ・ 洗練されたさまざまなモデルが提出され(e.g., Nowicki & Duke, 1994)、レビューも多い(e.g., Buck, 1984; Hall & Bernieri, 2001; Rosenthal et al., 1979)
- ・ 主に用いられる測定はDANVA<sup>7</sup>, DANVA-2(Nowicki & Duke, 1994)、JACBART<sup>8</sup>(Matsumoto et al., 2000)など(付録表1参照)。

### *Use of emotional information in thinking.*

- ・ 重要な問題に対して感情を生起させ、その出来事に注目させる。
- ・ 特定の感情で特定の思考形態を促進(例.幸福感→想像性; Ambile et al., 2005; Averill & Nunley, 1992; Isen, 2001; Lyubomirsky et al., 2005)
- ・ 感情と思考をいつ結びつけ、いつ切り離すかを理解する
  - 感情ストループ;感情語を呈示。通常は色が言葉に干渉するが、高EI者はその傾向が少ない

### *Reasoning about emotions: emotional appraisal, labeling, and language.*

- ・ 感情の認知的評価理論では、感情とそれを引き起こす状況を結びつける
  - 正しく評価をするためには、feelingの正しいラベリングや分類が必要であり(Clore et al., 1987; Innes-Ker & Niedenthal, 2002)、それは高EIの基準ともいえる(MacCann et al., 2004; Parrott, 2002)
- ・ 自分自身と他者の感情の理解もこの中に含まれる。LEAS(Lane et al., 1994)などによって測定可能。

### *Emotion management.*

- ・ 感情を自己管理できるかどうかという側面は、主に臨床の知見から提出されたもの
  - 状況を再評価することによる感情の管理(Beck et al., 1979)
  - 職場での感情の管理(Hochschild, 1983)
  - 子供の発達分野との関連(Eisenberg, 2000)

## **Integrative-model approaches to emotional intelligence(統合モデルアプローチ)**

### *Izard's emotional knowledge approach.*

- ・ 統合モデルアプローチ<sup>9</sup>: 特定の能力の結びつきがEI全容の理解につながると考える  
例)IzardのEKT<sup>10</sup>(Izard, 2001):感情と状況のマッチング、表情からの感情認知の両方をさせている。
- ・ Izard(2001)は感情知識とEIを相反するものとしている
  - 適性-知識の連続体モデル(e.g., Lichten & Wainer, 2000)
    - ◇ 適性⇒論理的に考え、学ぶ潜在的な能力(capacity)、知識⇒実際に学習したもの
  - EIを適性、感情知識を知識と考えれば両者は相反するが、本研究の定義ではこれらは同範疇

### *The four-branch model of emotional intelligence.*

- ・ EIの4分岐モデルはEI全体を(a)正確な感情知覚、(b)感情を用いた思考の促進、(c)感情の理解、(d)感情の管理の4分野にわけ(る)(Mayer & Salovey, 1997; Salovey & Mayer, 1990)

<sup>7</sup> Diagnostic Analysis of Nonverbal Accuracy

<sup>8</sup> Japanese and Caucasian Brief Affect Recognition Test

<sup>9</sup> 統合モデルアプローチ(integrative-model approach): EIに関連する複数の能力がどう成果を予測するかに注目したEIへの理論的アプローチ。

<sup>10</sup> Emotion Knowledge Test

- 各分野は幼少時から徐々に発達し、複雑化。例) 表情認知⇒過程⇒欺瞞検出
- 一つの枝での成長が他の枝にも波及
- このアプローチで使用される測度としては、MSCEIT(Mayer & Salovey, 1997)があげられる

### Mixed-model approaches to emotional intelligence(混同モデルアプローチ)

- ・ 混同モデル<sup>11</sup>はEIをより広い意味で定義している
  - 非認知的なキャパシティー、コンピテンス、スキル(Bar-On, 1997)
  - 感情的、社会的に知性ある行動(Bar-On, 2004)
  - パーソナリティのドメインからの傾向性(Petrides & Furnham, 2003)
- ・ 元々EIに含まれない属性を同時に測っているため、EIそのものが重視されない

### Relating emotional intelligence to other psychological variables(EIと他の心理変数の関連)

- ・ 混同モデルに含まれている概念(アサーティブネス・達成欲求など)は重要なものだが、EIの一部ではない。別概念として位置付けたうえでEIとの関連を検討すべき

## MEASURES OF EMOTIONAL INTELLIGENCE (EIの測度)

### An evaluation of emotional intelligence measures(EI測度の評価)

- ・ この章では、各測度に対し「これらの測度はEIを測定しているか？」という質問を投げかける
- ・ 各テストの妥当性をはかる基準は Standards for Educational and Psychological Testing(Joint Comm. Standards, 1999)を採用。SEPTは以下の3つの基準を設けている
  - 基準1 EI理論と関連する適切なテストデザインが組み込まれているか
  - 基準2 測度の構造
  - 基準3 カギとなる基準とテストの関係

### Adequate test design(適正なテストデザイン)

- ・ テストの内容の適切さ、回答における反応の適切さ、テストの信頼性の高さを検討

#### *Content evidence of validity.*

- ・ テストの内容が測定すべきものにとりくんでいるかを検討
  - DANVA-2 は感情を抱いている顔や全身を見せ、感情を判断させる

#### *Response-process evidence<sup>12</sup> of validity.*

- ・ 回答を正解基準と比較する
  - JACBART;FACS(Facial Affect Coding System; Ekman & Friesen, 1975)設定の基準が存在
  - MSCEIT<sup>13</sup>; 専門家が作成した基準と標準化サンプルの回答という基準(両者は高相関)が存在

<sup>11</sup> 混同モデルアプローチ(mixed-model approach):さまざまな心理特性、能力、スタイルなどをEIと同一視する理論的アプローチ

<sup>12</sup> 反応プロセスの証拠(response-based evidence); そのテストが研究のために測定するとされている心的能力を引き出し背手いるかを投下たちで妥当性を検討する方法。

### Reliability of emotional intelligence measures.

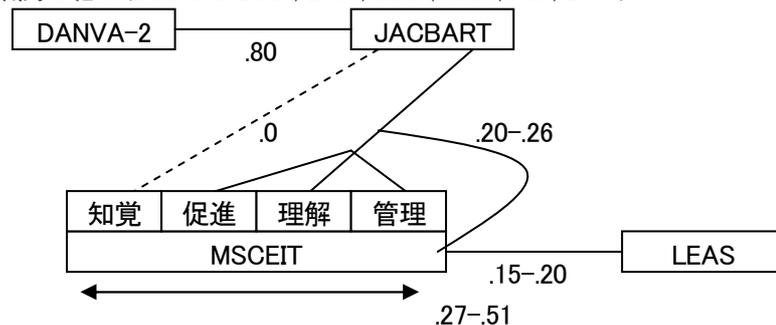
- 個人の回答が複数の項目間で一貫するかを検討する場合と、再テストを行って検討する場合がある
  - LEASやJACBART、MSCEITは相関が高い
  - 聴覚をつかったテストが含まれると相関が低い

### Validity evidence from factor structure(要因構造が裏付ける妥当性)

- 各能力は一つの知能としてモデル化が可能かを検討。
- EIは一つの広範囲な概念として MEIS や MECEDIT データを記述可能(Ciarrochi et al. 2000; Mayer et al. 2003, 2005; Palmer et al., 2005; Roberts et al. 2001)
- 更にその下には複数の相互に関連する因子が考えられる。例)MSCEIT⇒情動経験EI+情動戦略EI (Ciarrochi et al., 2001; Mayer et al., 2003; Roberts et al., 2006)
  - これらは知能が階層をなしているという著者たちの主張とも一貫

### Test relations to key benchmarks(重要な基準とのテストの関連)

- EIに関連する測度同士は相関してもおかしくないはずなのに、非言語的な表現を知覚する能力を測定する尺度同士の相関は低い(Boone & Buck, 2004; Buck, 1984; Hall, 2001)



(Nowicki, 2007; Roberts et al., 2006; Ciarrochi et al., 2003; Mayer et al., 2003)

- 尺度の関連や各尺度の源泉について研究していく必要があるだろう

### Relation to biopsychological processes.

- MSCEIT 解答中には、左前頭葉の極と左前側頭部(社会的協調と関連)の活動が活発(Reis, et al., 2007)
- LEAS高得点者は前帯状皮質の area24(感情関連の処理に関係)での反応が強い(Lanes, et al., 1998)
- 高EI者は感情関連の問題の回答において脳の関連部位がそれほど活動しない(Jausovec & Jausovec, 2005; Jausovec et al., 2001)
  - 高IQ者は低IQ者よりも問題を回答するとき脳の活動が少ない(=効率的)(Lane et al., 1998)

### Relation to intelligences and related mental abilities.

- MEIS、MSCEIT、LEASは言語ベースまたは知識ベースの知能テストと正の相関(Barchard, 2003; Ciarrochi, et al., 2000; Mayer et al., 1999; Roberts et al., 2001)
  - MSCEIT・MEISと言語知能・言語 SAT の相関は.36。
  - 他の知覚—組織的知能との相関はそれよりも低い(.10~.20)
  - MSCEITの感情理解得点は言語的/結晶的知能ともっとも相関する(7研究で平均.38)
  - EIの感情知覚得点と論理的思考テスト(≡流動性知能)得点との相関は.20以下

- 唯一の例外はJACBARTと流動性知能で.27。JACBARTの即断的特徴が寄与しているのだろう
- EIIは社会的知能と重なる部分もあるが、創造性とは無関連
  - MECEIT の下位尺度は経験的EIと戦略的EIに分けられる。このうち戦略的EI(理解項目)は O' Sullivan-Guilford Social Intelligence Measure と関連する(Barchard & Hakstian, 2004)
  - 能力として測定された感情関連の創造性とEIIはお互いにまったく独立(Ivcenic, et al., 2007)

#### *Relation to ongoing emotion and emotional empathy.*

- EIIは感情に関連する論理的思考と関係するが、その場で人がどう感じているかという問題とは無関連
  - MEIS<sup>14</sup>総得点と感情状態のあいだには関連がない(Mayer et al., 1999)
- ただし、EIの定義の中には共感の重要な側面である他者の感情の認識が含まれている
  - LEAS、MEIS、MSCEIT の得点と共感的感情の自己報告は相関(Brackett et al., 2006; Caruso et al., 2002; Ciarrochi et al., 2000, 2003; Mayer et al., 1999; Mayer & Geher 1996)

#### *Relation to benchmark personality traits.*

- EIIはBIG5<sup>15</sup>のうち、多くの知能と関連する開放性と低いが有意な相関(Mayer & Salovey, 1993)
  - MEIS と MSCEIT の総得点は開放性と.17~.18 の相関を示し、同意性と.21~.28 の相関

### **Measurement issues regarding mixed-model scales(混同モデル尺度に関する測定における問題)**

#### *Conceptual issues.*

- 混同モデルの尺度(Bar-On, 2000; Shutte et al., 1998; Tett et al., 2005)は、その概念を反映してEIと関連する他の属性とEIをごっちゃにしているため、EIを妥当に測定している証拠を欠いている
- すべて自己報告形式であるため、心的能力を直接反映するとはいえないし、実際に両者の関連は低い (Paulhus et al., 1998; Brackett et al., 2006)

#### *Indicative findings.*

- 混同モデルの尺度は全般的な快/不快の感情スタイルを測定している
  - Bar-On EQ-i<sup>16</sup>や多次的EI尺度は既存のBIG5の神経症傾向(の低さ)と.60~.70の相関 (Brackett & Mayer, 2003; Dawda & Hart 2000; Petrides & Furnham, 2001; Tett et al., 2005)
- 自己報告のEI測定では能力は測れない
  - Brackett たちは自分たちで4枝概念に基づく自己報告の尺度を作成し、対応するMSCEITとの相関を見たが、その値は.19。既存の自己報告の尺度でも同程度(Brockett & Mayer, 2003; Zeidner, et al., 2005)
- 混同モデルは科学的用語法に基づいたEIの定義を行っておらず、その測定法も妥当とは言い難い
- 多くの研究が混同モデルがEIを測定しているといえる論理的な理由がないとしている(Davies et al., 1998; Matthews et al., 2007; Mayer & Ciarrochi, 2006; Murphy, 2006)

<sup>14</sup> Multibranch Emotional Intelligence Scale

<sup>15</sup> BIG5; 外向性(Extraversion)、情緒不安定性(Neuroticism)、開放性(Openness)、良心性(Conscientiousness)、同意性(Agreeableness)の5特性からなるセット。各々はより特定の相互関連する特性の混合

<sup>16</sup> Emotional Quotient Inventory

## WHAT DOES EMOTIONAL INTELLIGENCE PREDICT(OR NOT) IN LIFE OUTCOMES? (EIは将来の何を予測する(orしない)のか?)

- ・ 本節では、測定されたEIが将来的にどのような結果を導くのかを検討した研究を挙げ、それらで得られた知見についてまとめる
  - 社会関係、学校、職場、精神的健康とEIの関連

### Social relations in childhood and adolescence(子ども期と青年期における社会関係)

- ・ EIはコンスタントに子どもの学業・社会における成果を予測

研究	参加者・方法	説明変数	基準変数	結果(r)	備考
Izard et al., (2001a)	5歳児	Emotional Knowledge score	小学3年生時の社会的スキル (アサーション、協力、自己統制 などの教師評価)	+	経済的に不利な立場にいる家 庭の子供対象。言語能力・性 別・性格特性を統制
Denham et al., (2003)	3-4歳児	感情制御・感情知識 (第三者評価)	3-4歳、幼稚園時の社会的能 力	+	
Mestre et al., (2006)	スペイン人15歳学生	MSCEIT(理解+管理)	引きこもり、じっとしてられない 仲間から大人として扱われる	-	
				+	

### Social relations in adulthood(成人期における社会関係)

*Diary studies and self-perceptions of social competence.*

研究	参加者・方法	説明変数	基準変数	結果(r)	備考
Lopes et al., (2004)	ドイツの大学生対象 10分以上の相互作用につ いて、2週間の日記研究	MSCEIT(知覚・促進・管理)	相互作用に対するポジティブな評価		
Brackettら(2006, study2)	友人同士	高EI	相手の成功への批判的反応、破	-.33	
			衝突時の破壊的・受動的反応	-.22~-0.27	

*Other's perception of the emotionally intelligent person.*

- ・ 高EI者は他者にもポジティブに評価される

研究	参加者・方法	説明変数	基準変数	結果(r)	備考
Brackett et al., (2006, study3)	参加者とサクラの会話を4名が評価	MSCEIT	相手への関心の高さ、会話への熱中度	0.5	男性参加者のみの結果
Lopes et al., (2005)	EIが高いと思う友人の名前を挙げる	MSCEIT(管理)	EI自己報告、他者から高EIと思われる	.28~.29	

*Emotional intelligence, family, and intimate relationships.*

- ・ EIは家族やそれ以外の親密な対人関係とも関連する

研究	参加者・方法	説明変数	基準変数	結果(r)	備考
Ciarrochi et al., (2000) Mayer, et al., (1999)		MEIS(知覚・理解・管理)	両親の温かさ	.15~.23	
Lopes et al., (2003)		MSCEIT(管理)	両親からのサポート	.22	
Brackett et al., (2004)		MSCEIT, EI	両親との会話	ns	
Carton et al., (1999)		DANVA-2 (顔知覚・声知覚)	親密な対人関係の質		
Ciarrochi et al., (2000)		MEIS(全般的EI)	関係の質	.22	
Lopes et al., (2004)		MSCEIT(管理)	恋人の質の高さの知覚	+	
Brackettら(2005)	カップル	MSCEITの組み合わせ (低-低)	関係の質	悪	
		MSCEITの組み合わせ (低-低以外)		良	

**Scholastic outcomes from grade school to college(小学校から大学までの学業成績)**

研究	参加者・方法	説明変数	基準変数	結果(r)	備考
Izard et al., (2001a)	5歳児	感情知識	学業成績	.43	
Halberstadt & Hall (1980)	22研究のレビュー	非言語情報への感受性	認知的能力と学業成績	+	
Mestre et al., (2006)	15歳のスペイン人学生	MSCEIT(戦略EI)	学業成績	.47	男子学生のみ。女子学生は性格特性、IQを統制するとnsに
Zeitner et al., (2005)	イスラエル人中学生	MSCEIT総得点		gifted学生 > nongifted学	
O' Connor & Little, (2003)		MSCEIT (総得点・戦略的EI・理解得点)	学業成績	.14~.23	認知的知性測定尺度との重複が原因かもしれない

### Emotional intelligence at work(職場におけるEI)

#### Decision making and negotiation.

研究	参加者・方法	説明変数	基準変数	結果(r)	備考
Day and Caroll, (2004)	社員解雇課題を実施。解雇する順にランキング作成	MSCEIT(総得点)	他者からのランキング評価	+	
		MSCEIT(知覚)	課題の成績	.17	
Matsumoto et al., (2004)	大学院生対象の組織シミュレーション	JACBART(感情知覚)	正しい問題分析	.28	
Elfenbein et al., (2007)	売り手と買い手に分かれた交渉課題	売り手のSingapore Picture Scale (JACBARTに類似)	ペア全体の利益 売り手の利益	+	買い手の得点は無関係
Mueller & Curhan, (2007)	MBAコース学生	MSCEI(理解)	交渉相手の交渉評価	+	実際の感情や相手の取り分を統制

#### Field studies of emotional intelligence and performance.

研究	参加者・方法	説明変数	基準変数	結果(r)	備考
Elfenbein et al., (2007)	メタ分析	感情認識の正確性	医師・ソーシャルワーカー、教師、校長、経営者の仕事場での	+	
Elfenbein and Ambady (2002)	アメリカ国内のNPOサービスプログラムのスタッフ	DANVA-2 (顔知覚)	上司からの仕事ぶり評価	+	声知覚では予測できず
Lopes et al., (2006)	アメリカの保険企業に在籍しているアナリスト・事務職/総合職の労働者	MSCEIT(総得点)	企業ランク、他者からの社会性評価、勤務環境への貢献	.28~.45	
Rosete & Ciarrochi(2005)	オーストラリアの大規模公共組織の経営者	MSCEIT (総得点、知覚、理解得点)	生産的な職場での関係構築評価、個人的な意欲や誠実性評価	.30中盤	実際の成果は予測できず
Cote & Miners, (2006)	大学スタッフ	MSCEIT(総得点)	管理職によるパフォーマンス、組織内市民行動評価	+	認知的知性が低いスタッフに顕著

**Psychological and physical well-being(精神・身体的健康)**

*Psychological well-being.*

研究	参加者・方法	説明変数	基準変数	結果(r)	備考
Brackett & Mayer, (2003) Brackett et al., (2006)		MSCEIT(総得点)	心理的健康	.16~.28	
Ciarrochi et al., (2000) Mayer et al., (1999)		MEIS(総得点)	生活満足度	.11~.28	
Brackett et al., (2006) Ciarrochi et al., (2000) Pitterman and Nowicki,		MSCEIT(総得点) MEIS(総得点) DANVA-2(理解)	自尊心	.19~.33	DANVAの結果は男性のみ
Carton et al., (1999)		DANVA-2(感情正確性)	抑うつ	-.42	
Bastian et al., (2005)		MSCEIT(総得点)	不安	.24	
Bastian et al., (2005) Matthews et al., (2006)		MSCEIT(総得点)	あがり	-.23~.16	

*Physical well-being.*

研究	参加者・方法	説明変数	基準変数	結果(r)	備考
Trinidad and Johnson, (2002)		MEIS(総得点)	若者の喫煙・飲酒	-.16~-0.19	
Brackett & Mayer, (2003) Brackett et al., (2004)	大学生	MSCEIT(総得点)	飲酒 麻薬使用	-.28 -.32	男性のみの結果。喫煙は予測せず 男性のみ
Engelberg and Sjoberg, (2000)	ストックホルム経済大学	感情知覚の正確性	インターネット中毒	-	

**Overall trends and intriguing findings(全体的なトレンドと魅力的な知見)**

- ・ これまで述べてきた研究の全体的なトレンドは表2のとおり。
- ・ それ以外にもEIは以下とも関連し、研究が進められている
  - 職業への関心(Caruso et al., 2002)、お金に対する態度(Engelberg & Sjoberg, 2004)、交渉での獲得金額(Elfenbein et al., 2007)
  - 感情的な盗聴(Elfenbein & Ambady, 2002)、情動関連の予測(Dunn et al., 2007)
  - 感情が激しい人はEIを使えるのかどうか(Gohm et al., 2005)、EIとアダルトアタッチメントの関連(Kafetsios, 2004)
  - EITレーニングとその結果について(e.g., Brackett & Katulak, 2006; Izard et al., 2004)

テストの名称	短縮	研究	内容	タスク
Diagnostic Analysis of Nonverbal Accuracy 2 1. Adult Facial Expressions 2. Adult Paralanguage 3. Poture Test	1. DANVA2-AF 2. DANVA2-AP 3. DANVA2-POS	1. Nowicki & Carton, (1993) 2. Baum & Nowicki, (1998) 3. Pitterman & Nowicki, (2004)	1. 24 枚の写真(喜び・悲しみ・怒り・恐れ×強弱。男女同数) 2. プロの俳優(男女1)がニュートラル文を読む 3. 32 の様々な姿勢(喜び・悲しみ・怒り・恐れ×強弱。男女同数。立ち+座り姿勢)	情動読み取り
Japanese and Caucasian Brief Affect Recognition Test	JACBART	Matsumoto et al., (2000)	日本人・中国人56名の写真(幸福、軽蔑、嫌悪、悲しみ、怒り、驚き、恐怖)の情動を読み取る 0.2 秒呈示。同じ人物の中立表情出前後にマスクング	情動読み取り
Levels of Emotional Awareness Scale	LEASD	Lane et al., (1990)	人物が2名(あなた&相手)が登場する場面20個を読み、それぞれで登場人物の感情を記述する 全部で20問。情動知覚低~高で評価	自分と相手の感情を記述
Emotion Knowledge Test	EKT	Izard et al., (2001); Mostow et al., (2002); Trentacosta & Izard, (2007)	表情課題×26 社会的状況記述課題(2~3文の状況記述)×15 社会的行動記述課題(2~3文の状況記述)×15	主人公の感情を推測
Mayer-Salovey-Caruso Emotional Intelligence Scale  Multibranch Emotional Intelligence Scale	MSCEIT MEIS	Mayer et al., (2002a); Mayer et al., (2003)  Mayer et al., (1999)	8課題 141 項目 (a)表情(b)landscape の知覚 情動を(c)共感覚(d)思考の促進に利用 情動の(e)変化(f)混じり合いの理解 (g)自分自身(h)対人関係上の情動の管理	※より長いバージョンも存在
Emotional Quotient Inventory	EQ-i	Bar-on (1997)	133 項目5因子 15 下位尺度 個人内因子、個人間因子、適応因子、ストレス管理因子、全般的ムード因子	自己報告
Self-Report Emotional Intelligence Test	SREIT	Schutte et al., (1998)	33 項目	自己報告
Multidimensional Emotional Intelligence Assessment	MEIA	Tett et al., (2005, 2006)	118 項目10下位尺度 概念的には Salovey & Mayer(1990)を踏襲	自己報告

## DISCUSSION

### The scope and measure of emotional intelligence(EIの範囲と測定)

- ・ EI研究が登場してから18年が経過。わかったことも多いが未検討のことも多い
- ・ 本章で紹介したのは以下のこと
  - 知能と感情の概念についての主流な考え方
  - EIの定義と研究領域
  - 特定能力モデル、統合モデル、混同モデル
  - EIを測定する諸尺度の構成概念妥当性に問題があること
  - 特定能力モデルと統合モデルからは、EI特有の心理的概念が測定できること

### Outcomes of emotional intelligence(EIのもたらす成果)

- ・ EIはいくつかの領域において重要な評価基準を予測できる
  - 良好な社会関係、問題行動の減少
  - この関係は幼少時期から大人になっても続く
- ・ いくつかの研究では一貫しない成果が認められるが、研究を蓄積させていくことにより、曖昧さは徐々に消えていくだろう

### Concluding comments(おわりに)

- ・ まとめと今後研究すべき内容については表を参照
- ・ EIの理論や測定の研究をすすめていくことは感情や知能の研究に寄与し、人類の能力のさまざまな領域やその生活への応用における感情要素の重要性への自覚を高めていくことだろう。

## FUTURE ISSUES

1. EIは既存の心的能力の包括的な分類(Carroll, 1993)の中に位置づけられるのか？
  - 分類の中に含めることによって、心的能力の理解や相互関係、測定の確実性を高める
2. 本文中で述べた以外にも、EIが予測できるものはあるか？
  - 学校や職場での人員削減、出席率、満足度、精神分析グループ、セラピーなど
3. メタ分析によって明らかになることは何か？
  - レビューで得られた知見をメタ分析を行って確認することが重要。
  - 特定能力モデルや統合モデルに基づく測度間の相関に特に注目すべき
4. 感情知識教育の効果は？
  - 実験室実験、フィールド研究などによってEI教育特有の効果の存在を検討すべき

#### SUMMARY POINT 1 Emotional Intelligence とは？

- EIは感情に対して正しく理性を働かせる能力と感情や感情関連の知識を使って思考を促進する能力である。

#### SUMMARY POINT 2 特定能力アプローチ・統合モデルアプローチ

- EIへの理論的アプローチは2つに分類される。特定能力アプローチではどちらかといえば別々のものと考えられている情動関連の情報を処理する心理的能力をとりあげる。統合モデルアプローチでは複数のEI領域で述べられているスキルを結びつける包括的枠組みについて述べる

#### SUMMARY POINT 3 混同モデルアプローチ

- 特定能力アプローチや統合モデルアプローチといった中心的なものとは別に、混同モデルアプローチと呼ばれる3つめのアプローチをとる研究者もいる。このモデルではアサーティブネス、柔軟性、獲得欲求などといった、感情的な合理化や感情についての知識に元々フォーカスしていない様々な属性を混同している。これらのモデルは本章で述べるEIの範疇には入らない。

#### SUMMARY POINT 4 特定能力・統合モデルアプローチ測度の妥当性

- 特定能力アプローチまたは統合モデルアプローチに基づくEIの測度はグループ(全体?)としてテスト妥当性を示している。この結論は(a)テストのデザイン(内容、反応プロセス、信頼性)(b)テストの構造(要因の妥当性)(c)テストの収束または拡散的な妥当性(基準変数との関連)の3点の分析から導き出される。これにまつわる深刻な問題は、正確な感情知覚を測定した尺度が互いに高い相関を示さないことである。感情知覚の分野における測度同士の収束性の欠落の原因は未解明である。

#### SUMMARY POINT 5 混同モデルアプローチ速度の妥当性

- 混合モデルに基づくEIの測度では、その領域の妥当な測定はできていない。この結論は各測度が(a)実際の能力ではなく自己概念を測定するような反応をとっている(b)本章でいうEI概念には含まれないような属性(柔軟性やアサーティブネス)を利用している(c)これまでに研究がすすんでいる他のパーソナリティ特性と大幅にかぶっているという3点から導き出される

#### SUMMARY POINT 6 EIが予測するもの

- EIは現実世界における多くの領域で、さまざまなサンプルに対して得られた結果を有意に予測する。EIは社会関係、職場でのパフォーマンス、精神的・身体的健康を予測する

#### SUMMARY POINT 7 EIによる社会での成果予測

- EIは他の知性や社会—感情関連の特性の測定よりも、社会での成果を予測するうえでの妥当性が高いことが多い

#### SUMMARY POINT 8 EIの意義

- EIと人生の成果の関係は、EIは実践者が人間行動を理解し、介入していくうえで価値をもつことを主張する。